

卒業時における質保証の取組の強化

山形大学

学士課程基盤教育機構 機構長 千代 勝実

1 はじめに

山形大学では2017年度から人文社会科学部・地域教育文化学部・理学部・工学部で改組を実施した。あわせて2010年度に開始した主に1年次向けの共通教育である基盤教育を基盤共通教育として、各学部の専門教育を基盤専門教育として再構成し、学長主導のマネジメント体制を確立した。さらに全学・学部のDPに基づき、それぞれのミッションを明確化した。これにより、学生が受講したい授業を自由に選択するアラカルト方式（2009年以前）→大学が学ばせたい内容を教育する定食方式（2010年から）→DPに基づき体系的な学び、自律的な学びを修得するしくみを作った。そこで必要となるのが、学生が本当にDPに基づく学びを身につけているか評価・検証し、改善していくサイクルである。

2 直接評価指標としての基盤力テスト

上記のような評価・検証と改善のために必要となるのが、学生の学修到達度を測定するための指標である。多くの大学と同様、山形大学でも学生による授業改善アンケートや学修成果等アンケートなどを実施しているが、すでにスコアが上がりきって飽和していると共に学生の到達度を適切に反映しているわけではないために教育改善の方針が立たないという間接指標特有の問題点があった。GPAもモニタリング指標としては有用ではあるが本命の教育改善には利用できない間接指標である。

山形大学では、教育改善に資するための客観的な直接評価指標としてルーブリックと標準テストを検討し、コストパフォーマンスとスケーラビリティから標準テストを採用した。これが基盤力テストである。基盤力テストは山形大学の全ての学生が1年次入学当初、2年次春、3年次に受検するスマートフォンのアプリベースの標準テストであり、学生の解答に応じて出題が変化する項目反応理論に基づいたCAT（Computer Assisted Testing）である。実施率は99%以上（1年次入学当初）となっている。実施科目は数的文章理解、語彙力（以上全学生）、数学、物理学、化学、生物学（以上理系学部生）およびキーコンピテンシーに関連する主要5因子性格調査であり、所要時間は理系学生で約30分である。

3 基盤力テストの評価

基盤力テストは2017年～2019年度で3年分の追跡調査が可能となった。この結果の概略を述べると、

- ・入学時の学修到達度の年度間の差は我々の想像より大きかった
- ・学んだ科目数に相関して対応する科目の到達度は伸びる
- ・1度学んだことでも時間をおくと到達度が低下する
- ・同じ教育を受けると学生ごとに異なっていた到達度が収束していくように見える
- ・学生の習慣と成績や到達度には相関があるものもある

このような結果に基づき、教育改善のフェーズとしてそれぞれの学部でカリキュラム・教育内容の再検討が行われている。基盤力テストについては、2017年度の開始時にすでに卒業直前の学生に実施し追跡調査が可能な状態になっているため、卒業後も含めた評価検証を継続していく。

4 今後の展望

基盤力テストは山形大学における広範囲な教育の質保証の取組の一部であり、専門教育に接続するFirst Year Experience、PBL、フィールドラーニング、早期インターンシップなどによる教育の実質化、IR/IEによる客観的かつ測定可能なエビデンスに基づく教育改善を進めていく。（山形大学OIRE Web <https://ir.yamagata-u.ac.jp>）

